琉球大学学術リポジトリ

北琉球方言における同化と異化

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所 公開日: 2016-05-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: かりまた, しげひさ, Karimata, Shigehisa / 狩俣, 繁久 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33926

国際沖縄研究　創刊号
2010 年 3 月　123–143 頁

IJOS: International Journal of Okinawan Studies
Premier Issue　March 2010, pp. 123–143

北琉球方言における同化と異化

かりまた　しげひさ*

Dissimilation and Assimilation in Northern Ryukyuan Dialects

KARIMATA Shigehisa

This paper examines how “dissimilation” and “assimilation” have occured in phonological change in Northern Ryukyuan dialects. By dividing phonological changes in the Northern Ryukyus into “dissimilation” and “assimilation,” I will examine how phonemic insert, loss, merger, and split occurred in the dissimilation and assimilation processes in the formation of compound/derived words and their grammatical structures, while pointing out that there are several types of these phonemic changes. Clarifying both the dissimilation and assimilation process, as well as analyzing how these processes interact with each other in phonemic changes, the present analysis will contribute to our better understanding of the past and present conditions of phonemic change in Northern Ryukyuan dialects.

1.　同化と異化

北琉球方言には狭母音化や二重母音の融合などの母音変化がある。破裂音化・破擦音化・摩擦音化・鼻音化などの調音方法の変化、口蓋音化・唇音化などの調音位置の変化、喉頭音化などの声門の状態の変化などの子音変化がある。音韻変化の要因にもいろいろあるが、筋弾性的な条件がつよく関与した音韻変化があり、空気力学的な条件がつよく関与しておきる音韻変化がある[1)]。特定のフォネームが隣接する他のフォネームの音韻的特徴（以下、韻質）や音環境に依存せず、すべてのアロフォンが音韻変化するばあいもあるし、音環境や結合するフォネームの韻質に依存した特定のアロフォンにおきる音韻変化もあるし、特定の単語にだけみられる音韻変化もある。さまざまにみられる琉球方言の音韻変化は、おおきく同化と異化の二つにわけることができる[2)]。

同化とは、前後するふたつのフォネームの一方から他方への、あるいは相互の影響のもとに、一方のフォネームの韻質の一部あるいは全部がもう一方に付与されて韻質に変

* 琉球大学教授 Professor, University of the Ryukyus

化をもたらしたり、あるいは二つのフォネームが相互に韻質を交換して変化したりする音韻変化である。同化は、前後に配置されたフォネームの韻質におおきく依存した相互作用によって生ずるさまざまな音韻変化を総称したものである。

琉球方言の同化には隣接同化と遠隔同化がある。隣接同化と遠隔同化は、付与される韻質の方向によって進行同化、逆行同化、相互同化にわかれている。それぞれの同化には影響をあたえる韻質の程度によって完全同化と部分同化とがある。

いっぽう、ある特定のフォネームが前後に配置された別のフォネームから相対的に独立して変化し、異なる韻質をもつようになる音韻変化を「異化」とよぶ。「異化」のこのような使用は、「同一ないし類似した音が音連鎖のなかで隣接ないし近接した場合に、一方が他方とは異なった音に変わる現象で、同化に対立する[3)]」という一般的な使用とは少し異なり、さししめす現象の範囲はひろい。しかし、「同化に対立する」という異化の説明を拡大して使用するものである。同化によらないさまざまな音韻変化を異化と総称することにする。

異化が前後のフォネームから相対的に独立した音韻変化であるとはいっても、単語を構成する音節構造のなかで個々のフォネームが孤立して存在しているわけではなく、前後に配置されたフォネームは、相互に密接にむすびつき、当該のフォネームが音韻変化するための音環境を提供していて、間接的に影響をあたえている[4)]。

異化と同化は、性格のことなる音韻変化であるが、特定の音環境をもった単語のなかで同化と異化が連続しておこり、一方がもう一方をひきおこすための条件や前提をつくりだしているばあいもある。異化と同化の結果、単語の音節構造のなかでのフォネームのふるまい方、あるいはフォネーム同士の関係のし方に変化が生じるが、それを音挿入[5)]、音消失[6)]、音分割[7)]、音融合[8)]のタイプにわけることができる。

2. 母音の異化

琉球方言には多様な異化がみられるが、狭母音化は、琉球方言の代表的な異化であり、おおくの子音変化にも影響をあたえていて、琉球方言を本土諸方言から区分する音韻論的な特徴をうみだした。琉球方言において異化をひきおこした要因もさまざまあるが、呼気流の増減という空気力学的な条件の関与した異化がおおい。

北琉球方言の狭母音化 *o ＞ u、*e ＞ ï ＞ i も呼気流のつよまりという空気力学的な条件が優勢にはたらいたもので、先行、後続の子音の如何をとわず独立しておきている[9)]。

2–1 奥舌半狭母音 *o の奥舌狭母音化

奥舌半狭母音 *o の奥舌狭母音 u への変化は、声道をながれるつよい呼気によって舌の盛り上がりによる声道のせばめの位置が軟口蓋後部から軟口蓋中央部へとおしやられ、口のひらきもせまくなったものである。*o の円唇性もひきつがれている。その結果、もとから存在した u と統合している。沖縄島中南部諸方言、沖永良部与論沖縄島北部諸方

言では *o は u に変化しているが、奄美徳之島諸方言では u に変化せず o のままあらわれる語がみられる。

ʔuja（親）、mutʃi（餅）、t‘uri（鳥）、k‘udzu（去年）、nudu（喉）、duru（泥）、k’imo（肝）、mado（間）、k‘oro（心）、moho（婿）、momo（腿）　　奄美大島龍郷町瀬留

ʔutu（音）、ʔuja（親）、ɸudu（去年）、ɸuri（これ）、kumu（雲）、kimu（肝）、pu:（帆）、puʃi（星）、pitʃu（人）、tui（鳥）、tudʒi（妻）、’utu（夫）、’uba（叔母）、miʃu（味噌）、duru（泥）、mumu（腿）、juru（夜）　　与論町城

ʔuja（親）、ʔut‘u（音）、k‘uk‘uru（心）、mu:k‘u（婿）、suk’u（底）、suwa:（側）、t‘ui（鳥）、mat‘u（的）、duru:（泥）、madu:（間）、nuk‘ugiri:（鋸）、mumu:（腿）、mutʃi:（餅）、k’imu:（肝）、junawi（夜なべ）、juk‘u（横）　　沖縄島名護市幸喜

2–2　前舌半狭母音 *e の前舌狭母音化

前舌半狭母音 *e の中舌狭母音 ï への変化、および、前舌狭母音 i への変化は、つよい呼気流によって舌全体とそのもりあがりの最高点が前寄りに移動し、口のひらきも狭くなったものである。中舌狭母音 ï は、奄美徳之島諸方言であらわれ、沖永良部与論沖縄島北部諸方言、沖縄島中南部諸方言では舌面が前寄りに移動し口の開きのせばまった前舌狭母音 i があらわれている。奄美徳之島諸方言では *e のおおくは ï にとどまっている。また、竜郷町瀬留方言には warabë（童）、ʃiragë（白髪）、ʔjemë（夢）などのように半狭の中舌母音であらわれる単語もある。奄美徳之島諸方言の狭母音化は完了していないのである。

ʔamï（雨）、k‘ï（毛）、k‘ït‘a〜k‘ët‘a（桁）、t‘ï（手）、t‘ïŋ（天）、ʔudï（腕）、nï（根）、ɸïra（箆）、ʔasï（汗）、k‘adzï（風）、nabï（鍋）　　龍郷町瀬留

ʔibi（エビ）、ʔami（雨）、na:bi（鍋）、ki:（毛）、saki（酒）、ka:gi（陰）、ti:（手）、ʔudi（腕）、ɲi:（根）、ʔaʃi（汗）、kadʒi（風）　　沖縄島西原町小那覇

前舌歯茎を調音点にもつ子音 t、d、n と結合する ï は、前寄りのアロフォンであらわれ、i に統合しつつある。奥舌軟口蓋や両唇を調音点にする子音 k、g、p、b、m、ɸ と結合する ï は、やや奥よりのくらい音色をもったアロフォンであらわれる。唇音 m、ɸ と結合した mï、ɸï は 70〜60 代以降の世代では ʔamu（雨）、mamu（豆）、ɸura（箆）、nabu（鍋）のように、u に統合しつつある。前者の tï ＞ ti、dï ＞ di、nï ＞ ni は、沖永良部与論沖縄島北部諸方言、沖縄島中南部諸方言とおなじく狭母音化が進行しているともみるとができるが、後者は、狭母音化とはことなる、聴覚的な印象の近似に起因する異化だと

かんがえる。

沖縄南部阿嘉島方言、慶留間島方言では短母音 e は狭母音化して i であらわれるが、長母音は、狭母音化しない e: があらわれる[10)]。ほとんどの下位方言で e ＞ i の狭母音化が完了している沖縄諸島方言にあって阿嘉島方言と慶留間島方言で狭母音化しない e: がみられる詳細な理由はわかっていない。

ke:（毛、木）、me:（目）、ka:me:（亀）、he:（屁）、te:（手）　　座間味村阿嘉

3.　子音の異化

北琉球方言の子音の異化には、無声破裂音の喉頭音化、破裂音の摩擦音化（*p ＞ ϕ ＞ h、*k ＞ h、*t ＞ s、*t ＞ λ[11)]）、破擦音の摩擦音化（*ts ＞ s）、接近音のゆるやかな声だてへの変化（*w ＞ ’）がある。

3–1　破裂音の喉頭音化と非喉頭音化

奄美徳之島諸方言、沖縄島北部諸方言で無声の喉頭音化した破裂音は、狭母音化をひきおこした呼気流によってひきおこされたものである。狭母音 *u、*i と結合した無声破裂音 *k は、せまい声道をながれる相対的につよい呼気流によって声帯筋が緊張し、喉頭音化したアロフォン k’ としてあらわれる。いっぽう、広母音 *a、半狭母音 *o、*e とむすびついた *k は、ひろめの声道をながれる相対的によわい呼気流に照応して声帯筋が弛緩した喉頭音化しないアロフォン k‘ としてあらわれる。

狭母音化が進行して k‘o が k‘u に変化すると、喉頭音化した k’ と喉頭音化しない k‘ は、フォネームとしての対立に移行し、無声破裂音に喉頭 / 非喉頭のあらたな音韻的な対立が生じることとなる。同様に *ki ＞ k’i と *ke ＞ k‘ï ＞ k‘i、*pu ＞ p’u と *po ＞ p‘o ＞ p‘u、*pi ＞ p’i と *pe ＞ p‘ï ＞ p‘i のあいだでも喉頭 / 非喉頭の対立が生じたとかんがえる。無声破裂音に喉頭 / 非喉頭の対立が確立されると、k‘a、p‘a のように *a と結合する喉頭音化しないアロフォンの k‘、p‘、同じく t‘a、t‘u、t‘ï（沖縄島北部諸方言では t‘i）のように *a、*o、*e と結合する喉頭音化しないアロフォン t‘ をフォネームとして編成する。なお、奄美大島諸方言のばあい、語中の破裂音でも喉頭 / 非喉頭の対立がみられる。

k‘umï（米）、k‘uï（声）、ʔik‘i（池）、k‘ï（毛）、k‘asa（笠）、k‘am ï（亀）、k‘o（皮）、k’umi（組）、k’ubi（首）、k’ura（倉）、k’iŋ（衣）、ʔik’i（息）　　龍郷町瀬留

今帰仁村方言のばあい、*po も *pu も p‘u に統合され、そこでは喉頭 / 非喉頭の対立は失われているが、*pe 由来の p‘i と *pi 由来の p’i は喉頭 / 非喉頭の対立を維持している。今帰仁村方言の p‘ は、破裂がやわらかく、服部四郎（1951）が「琉球語今帰仁村与那嶺方言の［p‘ana:］〈花〉〈鼻〉の［p］は息の閉鎖音であるが、呼気が弱く、気圧がよわく、し

たがって出わたりの破裂も弱い」と記している。かたい響きの印象をうける喉頭音化した破裂音と破裂のよわい喉頭音化しない破裂音とのちがいははっきりしている。

p‘ana:（花、鼻）、p‘ak’a:（墓）、p‘aɸu:（箱）、p‘ama（浜）、p‘o:tʒi（箒）、p‘o:tʒa:（包丁）、p‘e:（灰）、p‘e:（蝿）、p‘e:（南）、p‘u:（帆、穂）、p‘uɲi（骨）、p‘ira（箆）、p‘iri:（縁）、p‘udi:（筆）、p‘uju:（冬）、p‘uɲi（船）、p’idʒi:（髭）、p’idʒi:（肘）、p’iru:（昼）、p’ima:（暇）、p’iru:（蒜）、p’idʒai（左）　沖縄島今帰仁村謝名

3–2　両唇破裂音の摩擦音化

笠利町佐仁方言、与論島方言、今帰仁村方言、名護市方言、恩納村恩納方言は、p を保存しているが、おおくの北琉球方言では p の摩擦音化が進行している。

沖縄島北部大宜味村大宜味方言では *a、*o、*e と結合した *p は、注意ぶかく観察していないと上下の唇がふれていることをみのがしてしまうほど唇の閉鎖がとてもやわらかく、ᵖɸ と表記するような破裂音で、ᵖɸ〜ɸ でゆれている。今帰仁村方言や与論方言の p よりもさらにやわらかい。両唇摩擦音 ɸ に変化しきってしまう直前の状態なのであろう。摩擦音化していない p は、喉頭音化した p’ であらわれることもあるし、喉頭音化しない p‘ であらわれることもあって、対立する一方の音声（p‘）が摩擦音化することによって、もう一方の音声（p’）は、喉頭音化が必ずしも義務的ではなくなっていくのであろう。喉頭 / 非喉頭の対立から破裂音 / 摩擦音の対立へと移行していっているようである。

ᵖɸana（鼻）、ᵖɸana（花）、ᵖɸai（針）、ᵖɸabu（ハブ）、ᵖɸagama（羽釜）、ᵖɸa:（歯）、ɸuni（骨）、ɸu:（穂）、ɸu:（帆）、ɸuʃi（星）、ᵖɸira（箆）、puʃi（節）、piru:（昼）、pigi（髭）、pi:（火）、pi^{d}zai（左）、pi:（屁）　大宜味村大宜味

沖縄島北部の国頭村宇嘉方言、辺野喜方言では擬声擬態語以外の名詞、動詞の語頭の p は、結合する母音の如何をとわず摩擦音化して ɸ であらわれる[12)]。

ɸa:（葉）、ɸama（浜）、ɸana（鼻）、ɸigi（髭）、ɸigai（左）、ɸira（箆）、ɸuʃi（節）、ɸu:（穂）、ɸuni（骨）、ɸo:ta（包丁）、ɸe:（灰）、ɸe:（蝿）　国頭村宇嘉

奄美大島諸方言、徳之島諸方言、沖縄島中南部諸方言では、p ＞ ɸ ＞ h の変化が進行し、完了している。ただし、u、ï、ë と結合するばあいは両唇摩擦音 ɸ のアロフォンがあらわれ、i と結合するばあいは歯茎摩擦音 ç のアロフォンがあらわれる。

ha:（歯）、hatʃi（蜂）、hat‘ë（畑）、ɸunï（舟）、ɸunï（骨）、çigi（髭）、çikjusï（挽臼）、çu:ri（日和）、ɸï（屁）、ɸë（蝿）、ɸë（灰）　龍郷町瀬留

ha:（歯）、hatʃi（蜂）、hataki（畑）、ɸuɲi（舟）、ɸuda（札）、ɸuɲi（骨）、çidʒi（髭）、çitʃiʔu:ʃi（挽臼）、çi:（屁）、çi:ra（箆）、he:（蝿）、he:（灰）　　西原町小那覇

3–3　奥舌軟口蓋破裂音の摩擦音化

喜界島方言、沖永良部島方言、与論島方言、沖縄島北部諸方言で *a、*o、*e と結合した語頭の軟口蓋破裂音 k の声門摩擦音 h への異化がみられる。

hadi（風）、hanï（金）、hanï（銭）、hama（鎌）、ho:bï（頭）、hat‘ana（包丁・刀）、haŋami（鏡）、hi:（毛）、hi:（木）、hibuʃi（煙）、humï（米）、huʃi（腰）、k’imu（肝）、k’iɲu:（昨日）、k’ubi（首）、k’umu（雲）　　喜界町佐手久

hata（肩）、hagi（影）、hama（鎌）、hari（舵）、hagami（鏡）、hi:（毛）、hibuʃi（煙）、hu:（粉）、humi（米）、hui（声）　　国頭村宇嘉

語頭での *k ＞ h のみられない奄美大島南部諸方言でも広母音 *a、半狭母音 *e、*o にはさまれた語中の軟口蓋破裂音 k の声門摩擦音 h への異化がみられる。

naha:（中）、mahar（椀）、sëhë:（酒）、dëhë:（竹）、hat‘ë:hë（畑）、t‘oho:（蛸）、k‘oho:ro（心）、k‘oho:not（九つ）、wehë:（桶）　　奄美瀬戸内町芝

奄美大島北部諸方言、徳之島諸方言でも語頭では k の摩擦音化はみられないが、語中では k が h に変化し、さらに、母音間で有声音化して消失している。

na（中）、ma:ri（椀）、së（酒）、dë:（竹）、t‘ë:（丈）、hat‘ë:（畑）、wëŋ（分ける）、t‘o:（蛸）、k‘oro（心）、k‘onotʃi（九つ）、wë:（桶）　　龍郷町瀬留

3–4　歯茎破裂音の摩擦音化

国頭村宇嘉方言、辺野喜方言で *a、*e、*o と結合した語頭の歯茎の無声破裂音 *t の無声摩擦音 s への異化がみられる。

sa:（田）、saɸu（蛸）、sabaku（煙草）、satami（畳）、sui（鳥）、suha（十日）、suʃi（年）、ʃi:（手）、ʃi:（樋）、ʃira（太陽）、so:ɸu（豆腐）、ʃe:ɸu（台風）　　国頭村宇嘉

沖縄久高島方言で *a、*e、*o と結合した無声の歯茎の破裂音 *t の無声歯茎側面摩擦音 λ への摩擦音化がみられる[13)]。宇嘉方言、辺野喜方言の *t ＞ s とはことなり、久高島方言の *t ＞ λ は、語頭だけでなく語中でもおきている。ただし語中での摩擦音化のみられる語例はすくなく、破裂音 t であらわれるものがおおい。

λa:（田）、λa:bi（足袋）、λaλa:（砂糖）、λaλaŋ（畳）、λi:（手）、λindʒo:（天井）、λippu:（鉄砲）、λui（鳥）、λira（太陽）、λu:（十）、λo:pu（豆腐）

久高島方言では *a、*e、*o、*u と結合した無声歯茎摩擦音 *s の無声側面摩擦音 λ への異化がみられる。この異化は、歯茎音から側面音への調音点の変更である。この変化も語頭、語中でみられる。

λaλa:（砂糖）、haλa:（傘）、λa:ju:（白湯）、kuλa（草）、λi:（巣）、λiλi（煤）、λina（砂）、kuλui（薬）、λiŋ（千）、aλi（汗）、λuba（側）、kuλu（糞）、λo:（竿）

3–5　歯茎破擦音の摩擦音化

沖縄島名護市幸喜方言で無声破擦音 ts、tʃ が摩擦音化して ʃ、s であらわれる例がみられる。tsu ＞ ʃi、tʃu ＞ su のように母音が u のばあいに限定され、しかも後続の子音が無声子音に限定される。

ʃik’iʔusu:（搗き臼）、ʃik’idʒik’i（月々）、ʃik’imunu（漬物）、ʃik’ahaŋ（近い）、ʃik’aiŋ（使う）、suk’iri（一切れ）、suk’abu（一株）、suk’utʃi（一口）、suk’oibana:（造花）、sut’awai（一束）、sut’uk’uru（一所）、sup’a:ku（一箱）、sup’i:ru（一尋）

3–6　歯茎破擦音の破裂音化

国頭村宇嘉方言、辺野喜方言では歯茎破擦音 ts、dz の歯茎破裂音 t、d への変化がみられる。

ti:（血）、kuti（口）、ɸati（蜂）、timi（爪）、tira（顔）、tika（柄）、tiŋ（角）、mati（松）、sutiti（蘇鉄）、ta:（茶）、tagwaŋ（茶碗）、ho:ta（包丁）、tu:（人）、ti:ti（一つ）、ta:ti（二つ）、ititi（五つ）　　国頭村宇嘉

国頭村宇嘉方言、辺野喜方言では語頭、語中での d と r の区別がなく、ru:（胴）、surana（戸棚）、ruru（泥）などのように、すべて r であらわれる。したがって、有声破擦音 dz から破裂音化した d も r であらわれる。

ra:（座）、ara（痣）、ri:（地、陸）、ɸiri（肘）、hari（舵）、suri（妻）、miri（水）、kiri（傷）、ho:ri（麹）、amaraki（酢・＜甘酒に対応）、hari（風）、ro:（門）、aʃira（足駄）、huru（去年）　　国頭村宇嘉

3–7　接近音のゆるやかな声だてへの異化

両唇の丸めと奥舌面の軟口蓋へのもちあがりとを特徴とする唇軟口蓋接近音 w は、円

唇奥舌狭母音 u の特徴と近似する。*wo ＞ wu の狭母音化が進行すると、w は u に吸収されるが、w から o への持続部にみられたわたり的な特徴は、母音 u の入りわたりのゆるやかな声だてへと移行する。母音の入りわたりのゆるやかな声だてを「’」と表記する。*woba ＞ wu̯ba ＞ ’uba（叔母）。

いっぽう、語頭の母音単独音節 o、u に自然に挿入されるかるい ʔ は、*w の音消失によって発生した母音の入りわたりのゆるやかな声だての /’/ と音韻論的に対立するフォネーム /ʔ/ として確立された。/ʔ/ は、/’/ との音韻論的対立のなかで語頭の母音のまえに音挿入されたのである。

’u（緒）、’uba（叔母）、’udʒi（叔父）、’unagu（女）、’unari（姉妹・をなり）、’ugi（甘蔗・「荻」に対応）、’uduri（踊り）、’u:duri（雄鶏）　　竜郷町瀬留

*wi（*we から変化した wi を含む）が唇音退化して /’i/ になり、/ʔi/ との音韻的対立も発生している。*jui（結・相互扶助）＞ ’i: などのように、j のばあいにもやわらかな声だて /’/ への異化が進行したとかんがえる。

’i（亥）、’irjuŋ（坐る）、’idzï（絵図）、’içiri（兄弟・ゑけり）、’i:（柄）、’i:（良い）、’iri（襟）、’irjuŋ（貰う、「得る」に対応）、

3–8　両唇音の歯茎音化

沖縄伊江島方言で *i と結合した両唇破裂音 *p、*b、両唇鼻音 *m の歯茎破裂音 t、d、歯茎鼻音 n への調音点の変更という異化がみられる。この異化は、t’ja:hu（百）、t’ja:i（旱魃）、asidjuŋ（遊ぶ）、juɲuŋ（読む）などの語例にみるように、口蓋音化した両唇音 pj、bj、mj も口蓋音化した tj、dj、ɲ に変化している。この異化は、*i と結合した *p、*b、*m を含む口蓋音化した両唇音の口蓋音化した歯茎音への調音点の変更であり、声道の形が似ていることによる聴覚的な特徴の近似に由来する変化であるとかんがえる[14)]。pj ＞ tj、bj ＞ dj の異化は伊江島方言以外にはほとんどみられないが、mj ＞ ɲ、mi ＞ ɲi は個別的、散在的だがあちこちの方言にみられる。

t‘i:（火）、t‘iru:（昼）、t‘idʒai（左）、t‘idʒi（髭）、t’ja:hu（百）、t’ja:i（旱魃）、k‘udi（首）、t‘adi（旅）、ʔidi（エビ）、hadi（紙）、ʔasidjuN（遊ぶ）、naradjuŋ（並ぶ）、ɲiɲi:（耳）、ɲitʃi（道）、ɲidʒi:（右）、naɲi:（波）、ʔuɲi（海）、juɲuŋ（読む）

3–9　両唇音の軟口蓋音化

沖縄伊江島方言で *u と結合した両唇破裂音 *p の軟口蓋破裂音 k への異化がみられる。この異化は調音点の変更であるが、奥舌円唇狭母音 u と結合した両唇破裂音 p と k とは、その声道の形がよく似ており、したがって聞こえの相対的な近似に由来する変化ではな

かったかとかんがえる。上述の *pi ＞ ti、*bi ＞ di、*mi ＞ ni の異化と類似の変化である。

k‘uni（舟）、k‘uda（札）、k‘ubui（陰嚢）、k’uk’uɲuŋ（含む）、

国頭村宇嘉方言、辺野喜方言では唇軟口蓋接近音 w の唇軟口蓋破裂音 gw への異化がみられる。宇嘉方言、辺野喜方言の g および gw の破裂はやわらかく、有声軟口蓋摩擦音 ɣ で発音されることもあった。

a:（泡）、a:（粟）、ha:（皮）、na:（縄）など語中の *wa、*ha ＞ wa では w が音消失しているにもかかわらず、語中に wa を有した借用語「茶碗」では tagwaŋ（茶碗）のように wa の gwa への変化がみられる。また他の方言にみられる喉頭音化した唇軟口蓋接近音 ʔw も喉頭音化しない w とおなじく gwa に変化している。ʔw は、「ʔi、ʔu の音消失」の項で述べるように *uhabe ＞ ʔuwabe ＞ ʔwa:bi の過程を経て生成されたフォネームだが、宇嘉方言では ʔw と w の対立がうしなわれたのちに w ＞ gw の変化がおきたものとかんがえられる。

gwata（腹）、gwata（綿）、gwaki（脇）、gwara（藁）、tagwaŋ（茶碗）、gwahasa:ŋ（若い）、gwassa:ŋ（悪い）、gwarabi（童・子供）、gwa:bi（上・上辺に対応）、gwa:tiki（天気）、gwa:（豚）、gwaŋ（私）、gwe:ku（櫂）、gwe:kintsu（金持ち）、gwe:ha（親戚）、gwe:ntu（鼠）、gwahanati（若夏）、

4.　同化

母音と母音のあいだでおきる北琉球方言の同化には隣接同化と遠隔同化がみられる。遠隔同化とはいっても子音の持続部ですでに結合する母音の口がまえがとられていて、先行音節の母音と後続音節の母音は、相互に影響をあたえあう条件があり、隔たっているようにみえてもじっさいには隣接同化に同じだといってよいだろう。

これまで調査した範囲で子音と母音の隣接同化はあるが、遠隔同化による子音変化はみられなかった。開音節の CV 構造を基本とする北琉球方言にあって、子音と子音のあいだには母音がはさまるので、母音を介して子音同士が子音としての調音上の特徴を付与することはない。

4–1　母音の同化

北琉球方言の母音の隣接同化には相互同化がみられ、遠隔同化には相互同化、逆行同化、進行同化がみられる。隣接同化には部分同化の例がみられ、遠隔同化には完全同化と部分同化がみられる。

北琉球方言では二重母音の隣接相互同化とそれにともなう音融合がおきている。*ao ＞ o:、*ae ＞ e:、*ai ＞ e:、*eu ＞ u: などの同化は、祖形を日本祖語の *awo、*awe、*awi、

*api、*ape、*epu とみると、*awi、*awe、*awo では語中接近音 w の唇音退化による音消失が先行し、*api、*ape、*epu では語中両唇破裂音 p の摩擦音化、有声音化 w、唇音退化による音消失が先行していたとみられる。

4-1-1　母音の隣接同化

*au、*ao の隣接相互同化

*au ＞ o: は、a の広母音性と u の奥舌円唇性・狭母音性が影響をあたえあった相互部分同化で、円唇の奥舌半狭母音の o: に音融合（au ＞ o:）している。*au ＞ o: とおなじように、*ao ＞ o: の相互部分同化がみられる。

k‘o:dʒi（麹）、bo:（棒）、gumbo:（牛蒡）、p‘o:tʒi（箒）、ʔutʒato:（茶湯）、so:（竿）、ʔo:ʔiru（青色）、t‘o:suŋ（倒す）、no:suŋ（治す）　　今帰仁村謝名

*ai、*ae の隣接相互同化

北琉球方言で *ai ＞ ë: ＞ e: の相互部分同化がみられる。a の広母音性と i の前舌性・狭母音性が影響をあたえあった相互部分同化で、奄美徳之島諸方言では半狭の中舌母音 ë:（あるいは ə）に音融合している。沖永良部与論沖縄島北部諸方言では前舌半狭母音 e: に音融合している。*ai ＞ ë: ＞ e: とおなじように、*ae ＞ ë: ＞ e: の相互部分同化がみられる。奄美徳之島諸方言の ë: は、歯茎音 t、d、n、r、 s 、ts、dz と結合するとき前舌寄りに発音されて e であらわれ、両唇音と結合するとき奥舌寄りに発音されて œ であらわれることがある。

në:（地震）、ɸë:（灰）、t‘arë（盥）、më:（米）、mimë:（見舞い）、ɸë:（蝿）、ɸë:（南）、më:（前）、në:（苗）、瀬戸内町諸鈍

*iwa、*ewa の隣接相互同化

沖縄島中南部方言では語末に *e、*i を有する名詞にとりたて助辞 *wa が後接するとき、相互同化による音融合 *-iwa ＞ -ia ＞ -e:、*-ewa ＞ -iwa ＞ -ia ＞ -e: がおきている。

mame:（豆は）、sake:（酒は）、hane:（羽は）、ʔaʃe:（汗は）、ʔare:（あれは）、mime:（耳は）、muʃe:（虫は）、kutʃe:（口は）、tudʒe:（妻は）、kudʒe:（釘は）、midʒe:（水は）、ʃi:ʃe:（煤は）、rikutʃe:（理屈は）　　西原町小那覇

*uwa の隣接相互同化[15)]

沖縄島中南部諸方言で語末に *u、*o を有する名詞にとりたて助辞 *wa が後接するとき相互同化による音融合 *-uwa ＞ -ua ＞ -o:、*-owa ＞ -uwa ＞ -ua ＞ -o: がおきている。

muːko:（婿は）、duro:（泥は）、’uto:（夫は）、kado:（角は）、nuno:（布は）、majo:（眉は）、kudʒo:（去年は）、habo:（ハブは）　　西原町小那覇

4–1–2　母音の遠隔同化

遠隔相互同化

奄美大島南部瀬戸内町の加計呂麻島の芝方言の sëhë:（酒）、hat‘ëːhë（畑）、dëhë:（竹）、wëhë:（桶）、t‘oho:（蛸）などは、h の両側の a と e、o と e、a と o が遠隔相互同化をおこして、ë、o に変化したものである。*sake（酒）＞ sahe ＞ sëhë:、*woke（桶）＞ wohe ＞ wëhë:、*tako（蛸）＞ taho ＞ t‘oho: は、摩擦音化によって k から変化した語中の h の両側が広母音 a、半広母音 e、o という、音環境に依存した遠隔相互同化である。この遠隔相互同化は、加計呂麻島をふくむ奄美大島南部諸方言にみられる。

加計呂麻島の諸鈍方言のばあいも同様の遠隔相互同化がみられるが、諸鈍方言は、高低アクセントと強弱アクセントを並存させる方言であり、弱強型のリズム＝アクセント構造をもつ単語の第 1 音節めの弱音節の母音は、ë が ï になり、o が u になってあらわれる傾向がある。この狭母音化は、単語のリズム＝アクセント構造に依存した異化である。

dïhë:（竹）、juːjihë:（夕焼）、wïhë:（桶）、t‘uho:　　瀬戸内町諸鈍

奄美大島北部諸方言では、遠隔相互同化ののちに、語中の h が音消失して母音の融合した së:（酒）、hat‘ë（畑）、dë（竹）、wë:（桶）、t‘o:（蛸）などの例がみられる。

名護市幸喜方言では paru（畑）＞ p‘oroː、ʔupuhaŋ ＞ ʔup‘ohoŋ（多い）の遠隔相互同化の語例がみられる。後述するように名護市幸喜方言は、遠隔進行同化、遠隔逆行同化もみられる方言である。

遠隔進行同化

瀬戸内町諸鈍方言では *e に対応して ï が規則的にあらわれるが、çigi（髭）、ʔik‘i（池）、ʔiŋi（稲）、k‘iʃir（煙管）の語の第 2 音節めの母音は i があらわれている。先行第 1 音節めの母音 i の前舌狭母音性が遠隔進行同化によって第 2 音節めの母音に付与されて中舌狭母音 ï が前舌狭母音 i に変化した結果である。おなじ現象が他の奄美大島の諸方言でもみられる。

名護市幸喜方言では p‘agohoŋ（汚い）、magehaŋ（大きい）、sakohaŋ（脆い）のような遠隔進行同化もみられる。pagohaŋ ＞ p‘agohoŋ（汚い）は第 2 音節めの母音 o の影響による第 3 音節めの母音の完全同化の例だが、magihaŋ ＞ magehaŋ（大きい）、sakuhaŋ ＞ sakohaŋ（脆い）では第 1 音節めの広母音 a の影響によって第 2 音節めの母音の前舌性はそのままに口のひらきの広狭の変化 i ＞ e、u ＞ o がみられる。juːsuwai（寝小便・夜しばり）も第 1 音節めの母音 u の影響によって第 2 音節めの母音 i が u に変化した完全同化の例である。juːʃibai ＞ juːsuwai。

遠隔逆行同化

名護市幸喜方言にはつぎの遠隔逆行同化の語例もみられる。puta（蓋）＞ p‘at‘a、sikoiŋ ＞ sok’oiŋ（作る）、ja:so:dʒimuja: ＞ ja:so:dʒimaja:（ヤモリ・清水守（さうずもり））。

名護市幸喜方言には遠隔相互同化、遠隔進行同化、遠隔逆行同化がみられる。しかし、奄美大島南部諸方言の遠隔相互同化が特定の条件のもとで規則的におきるのに対して、幸喜方言のばあい規則的に遠隔同化がおきているわけではないようである。現段階で確認できた語例がすくないので、調査をすすめて、どのような条件のもとで同化がおこなわれるのか検討したい。

4–2　口蓋音化

南琉球方言のばあい、母音の音消失によって発生した成節的な子音 m、n、f、v、s、ts、dz が後続の子音を変化させるさまざまな子音の同化がみられるし、いちじるしい狭母音化による母音の摩擦音化によって生成された音節主音的な子音 s、z も隣接の子音を同化させる。それに対して、北琉球方言のばあい、子音同士の同化の例をみつけられていない。

瀬戸内町諸鈍方言では、ika（烏賊）＞ ʔik‘ja、mino（蓑）＞ miɲo などのように、i に後続するあらゆる子音が口蓋音化する。また、ito（糸）＞ ʔitʃu では口蓋音化にともなって、破擦音化もみられる。前舌狭母音 i の特徴が後続の子音に付与される進行部分同化である。おなじ変化が他の奄美大島南部諸方言でおきている。

ʃirjam（虱）、ʔuʃrjo（後ろ）、çidʒar（左）、mik‘jadɨk’i（三日月）、çigjaʃ（東）、ɲigjaʔuri（苦瓜）、ʔiʃgjak（石垣）、k’iɲu（昨日）、dʒirju（地炉）　　瀬戸内町諸鈍

çigi（髭）、ʔik‘i（池）、ʔiɲi（稲）、k‘iʃir（煙管）の単語の第 2 音節めの子音も先行音節の母音 i の影響で口蓋音化している。同時に母音も ɨ から i に狭母音化している。

西原町小那覇方言では、先行音節 i の影響で口蓋音化した子音のうち、kj、gj、k、g が破擦音化している語例がみられる。おおくの沖縄島中南部諸方言でもおなじ破擦音化がみられる。

ʔitʃa（烏賊）、’ndʒana（苦菜）、ʔitʃi（池）、çidʒi（髭）　　西原町小那覇

西原町小那覇方言の ʃiraŋ（虱）、dʒi:ru（地炉）tʃinu:（昨日）、’nnu（蓑）、ʔiʃigatʃi（石垣）などのように非口蓋音化（直音化）している語例も少なくない。

5.　音消失

単語を構成する複数個のフォネームのうち、単語内の特定の位置のフォネームが脱落

する現象を音消失 lost of phoneme という。脱落するフォネームの位置によって語頭音消失 aphaeresis、語中音消失 syncope、語末音消失 apocope がある。北琉球方言には語頭音消失、語中音消失、語末音消失がみられる。

1 個のフォネームが音消失することによってさまざまな音韻現象がおきている。子音の音消失によって新たな二重母音が発生したり、母音連続が音融合したり、母音の音消失によって新たなフォネームがうまれたり、成節的な子音がうまれたり、閉音節構造の単語がうまれたり、音韻体系に大きな変化をもたらすこともある。

5–1　語頭音消失

北琉球方言の語頭音消失の代表的な例は、語頭の無声子音 *pi、*pu の消失であろう。また、喉頭破裂音をふくんだ語頭音節 ʔu、ʔi が脱落し、それにともなって喉頭音化した鼻音 ʔm、ʔn、接近音 ʔw、ʔj、流音 ʔr があらたなフォネームとして生成されることも北琉球方言にみられる音消失の代表的な例であろう。

5–1–1　*pi、*pu の音消失

竜郷町瀬留方言の t’aːtzï（二つ）、今帰仁村謝名方言の t’aːtʒi（二つ）は、語頭音節 *pu の音消失によってできたものである。

無声子音と狭母音の結合した語頭音節に無声子音が後続するとき、語頭音節の狭母音は無声音化する。そのとき、語頭の無声子音と無声化母音の持続部でおおくの呼気がながれてしまうが、後続の破裂音の調音に際して声門をせばめたり、閉鎖したりして呼気の浪費をふせいだ結果、第 2 音節めの破裂音が喉頭音化したアロフォンとしてあらわれる。この現象は、ひろくみられる。

第 2 音節めの喉頭音化した子音は、はじめは語頭音節の無声音化にともなう音環境に依存してあらわれるアロフォン *pu̥t’atsï であったが、語頭音節の狭母音が弱化・消失して、重子音 *tt’atʃi が発生し、そののちに消失し延長代償として第 2 音節めの母音がながくなって t’aːtʃi の語形があらわれる。音環境に依存しないフォネーム /t’/ があらたに生成される。

竜郷町瀬留方言の tʒui（一人）、tʒu（人）、今帰仁村謝名方言の tʒui（一人）、tʒuː（人）では語頭の *pi が音消失した語形であり、t’aːtzï（二つ）のばあいとおなじ変化を経たものである。語頭 *pi は、第 2 音節の子音を口蓋音化させたのちに音消失している。

竜郷町瀬留方言の t’ïːtzï（一つ）、今帰仁村謝名方言の t’iːtʒi（一つ）も同様の変化を経ているが、第 2 音節めの子音が口蓋音化（破擦音化）していないことから、語頭音節は *pu であったと推定される[16)]。

喉頭音化した t’、tʒ がフォネームとして確立されると、喉頭音化しない t‘、tʃ とのあいだに音韻的な対立が生じ、無声破裂音に喉頭 / 非喉頭音の対立が発生して音韻体系の改変が行われる。

5–1–2　ʔi、ʔu の音消失

今帰仁村謝名方言の ʔwaːʃiba（上唇）、ʔwaːbi（上・上辺）、ʔwaːnai（嫉妬）などの語形にみられる ʔw は、語頭の音節の ʔu の母音が弱化によって音消失するさい、語頭音節の喉頭の緊張が後続の接近音 w に付与され、音融合によって生成されたフォネームである。他の沖縄島北部諸方言、西原町小那覇方言などの沖縄島中南部諸方言でも ʔu の音消失によって生成された ʔwaːbi（上・上辺）などの単語がみられる。

沖縄島中南部諸方言では末尾に母音 u を有する名詞にとりたて助辞 *wa が後接するとき、隣接相互同化をおこして -uwa ＞ -oː が発生しているが、おなじ音連続 -uwa をふくむ ʔuwabe ＞ ʔwaːbi は、母音の隣接相互同化ではなく、音消失と音融合がおきている。ʔuwa ＞ ʔwaː の音消失が北琉球方言全体にみられるのに対して、uwa ＞ oː の隣接相互同化が沖縄島中南部諸方言にしかみられないことから、名詞末尾母音 u ととりたて助辞 wa の相互同化のおきた時期がおそいこと、異なる変化過程をへたであろうことが予想される。

龍郷町瀬留方言の ʔjuː（魚）、ʔjaŋ（言わない）も喉頭音化した歯茎接近音 ʔj も語頭の母音 ʔi の弱化よって音消失するさい、語頭音節の喉頭の緊張が後続の接近音 j に付与されて音融合し、あらたに生成されたものである。語頭音節の母音が i であったために、後続の子音が口蓋音化して歯茎接近音 ʔj であらわれている。

*iwo ＞ ʔiju ＞ ʔjuː（魚）、*iwanu ＞ ʔijanu ＞ ʔjaŋ（言わない）

龍郷町瀬留方言の ʔɲiː（稲）、ʔɲaːdama（稲霊）、ʔɲuːtʃi（命）などの単語にみられる喉頭音化した歯茎鼻音 ʔɲ は、語頭の母音 ʔi が弱化によって音消失するさい、語頭音節の喉頭破裂音の喉頭の緊張が後続の鼻音 ɲ に付与されて音融合し、あらたに生成されたものである。語頭音節の母音が i であったために、後続の子音が口蓋音化した ɲ であらわれている。ʔmaː（馬）、ʔmaːga（孫）、ʔmaːre（生まれ・素性）などの単語にみられる喉頭音化した両唇鼻音 ʔm も、語頭の ʔu の母音の弱化によって音消失するさい、語頭音節の喉頭破裂音の喉頭の緊張が後続の鼻音 m に付与されて音融合し、あらたに生成されたものである。

今帰仁村与那嶺方言にも、喉頭音化した歯茎鼻音 ʔn を有する ʔnaːgara（稲株）、喉頭音化した両唇鼻音 ʔm を有する ʔmaː（馬）、ʔmaːri（生まれ・素性）、ʔmeːʃi（箸）、ʔmenʃeŋ（いらっしゃる）、ʔmoːruŋ（いらっしゃる）などの単語がみられる。

伊江島西江上方言の ʔraː（おまえ）は、与論島城方言の ura、伊平屋村我喜屋方言の ʔura の語頭音節の ʔu の母音の弱化によって音消失するさい、語頭音節の喉頭の緊張が後続の r に付与され、音融合によって生じた語形である。ʔr は、伊江島方言だけにみられるフォネームである。

5–2　語中音消失

語中の音消失には北琉球方言全体にみられる、*sawo（竿）＞ sao ＞ soː、*nawi（地震）＞ nai ＞ neː などの語中 *w の消失、*napa（縄）＞ naɸa ＞ nawa ＞ naː、*mape（前）＞ *maɸe ＞ mawe ＞ mae ＞ meː（以上、西原町小那覇方言）などの語中 *p の消失がある。また、奄美大島北部諸方言の *naka（中）＞ naha ＞ na、*tako（蛸）＞ taho ＞ t‘oː、take（丈）＞ tahe ＞ t‘ëː（以上、龍郷町瀬留方言）などの語中 k の音消失などがある。本稿では語中破裂音 b の音消失、語中鼻音 m の音消失、語中流音 r の音消失についてのべる。

5–2–1　語中 b 音の消失

沖縄島名護市幸喜方言で語中の両唇破裂音 b の接近音化とそれにつづく音消失がみられる。幸喜方言では *soba（側）＞ suba ＞ suwa、*dabi（茶毘）＞ dawi、sawani（サバニ）、のように b の接近音 w への異化がみられるが、さらに、*pabu ＞ pau、*nabe（鍋）＞ nabi ＞ nawi ＞ nai のような脱唇音化の進行した音消失がおきている単語もみられる。接近音化するまえに bu ＞ βu、bi ＞ βi、ba ＞ βa のような摩擦音化を経たであろうとかんがえる。語中 b の接近音化と唇音退化による音消失は、先行、後続の母音の韻質をとわない音韻変化である。ただし、語中の b がすべて消失するわけではなく、b のままあらわれる語例もおおいし、接近音 w であらわれる語例もある。どのような条件で b の接近音化と音消失がおきるのかについては不明である。

sawa（鮫）、sawani（サバニ）、t‘awak‘u（タバコ）、t‘uwasuŋ（飛ばす）、hawahaŋ（香ばしい）、t‘awi（旅）、k’ui（首）

5–2–2　語中 m 音の消失

奄美大島北部笠利町佐仁方言では語中の両唇鼻音 m の音消失した結果、鼻母音ができている。語中で m の両唇の閉鎖が開放されて鼻音化した唇軟口蓋接近音 w̃ が生成される。その後、両唇での丸めがとれて唇音退化して鼻母音 ã、õ、ĩ がうまれる。

p‘aã（浜）、jaã（山）、haã（鎌）、taãgo（卵）、ʔaãk‘a（甘い）、k’joõ（肝）、k’oõ（雲）、moõ（腿）、ʔoõgë（おもがい）、ʃoõ（島）、haw̃ï～haĩ（亀）、ʔaw̃ï～ʔaĩ（雨）、maw̃ï～maĩ（豆）、huw̃ï～huĩ（米）、tzïw̃ï～tzïĩ（爪）

5–2–3　語中 r 音の消失

伊江島西江上方言では語中の流音 *r が弱化した音消失がみられる。tsaː（面）、k’uː（黒）、ʃaːni（虱）、ʃuː（白）、ʔaitʃuN（歩く）、unai（をなり）、wik‘iː（ゑけり）、t‘ui（鳥）、nai（実）、t’idʒai（左）、p’ujuN（降る）。おおくの語例は、i に先行する r、あるいは口蓋音化した rj の音脱落である。a、o、u、e と結合する r の音消失は、先行母音が i のときに限定されておきる。

sui（鳥）、kusui（薬）、hannai（雷）、ɸugui（陰嚢・ふぐり）、nuɸugi（のこぎり）、saːmi（虱）、mussu（筵）、saːgi（白髪）、suːmi（脂肉・白身）、ɸeː（坂・ひら）、beː（葱・＜ bira）
伊江村西江上

他の沖縄中南部諸方言でも語中の r が母音 i と結合するときにかぎって r の音消失がみられる。ただし、nukudʒiri（鋸）のように、語中 ri の先行音節の母音が i のとき、r の音消失はおきていない。

tui（鳥）、kusui（薬）、haːi（針）、maːi（毬）、tai（二人）　　西原町小那覇

5–3　語末音消失

奄美大島南部諸方言では 2 音節名詞、3 音節名詞の語末の狭母音 *i、*u の弱化による音消失がみられる。加計呂麻島の諸鈍方言のばあい、「国語アクセント類別対応表」の 2 音節名詞 1 類、2 類の語末に狭母音 *i、*u を有する単語にほぼ限定され、3 類、4 類、5 類の名詞の語末の *i、*u は消失していない。諸鈍方言の 1、2 類名詞は下降調の acute accent で、第一音節目は高く強く、第 2 音節目は低く弱く発音され、筋肉の弛緩とともにピッチが下降する[17)]。狭い声道での共鳴を特徴とする i、u は、音響管としての効率の悪さから、相対的におおきい呼気流によって声帯を振動させるにもかかわらず聞こえはちいさく、つよさもつよくない母音であるが、下降調の acute accent のばあい、その傾向は顕著になり、*i、*u が弱化して消失したとかんがえる[18)]。

諸鈍方言をはじめとする奄美大島南部諸方言の語末音消失は、母音 i、u の調音上の特徴と空気力学的な特徴の相互作用、語末にあらわれるフォネーム構造、下降調の acute accent という条件がそろっておきている。*i、*u と結合する子音が破裂音、破擦音、摩擦音、鼻音、流音でも音消失がみられる。諸鈍方言の破裂音、破擦音にみられる有声・無声の対立も喉頭・非喉頭の対立も閉音節をつくる子音では中和している。

juk（雪）、mik（右）、k’up（首）、k’utʃ（口）、mït（水）、t‘utʃ（妻）、ʔin（犬）、mim（耳）、t‘ur（鳥）、çir（昼）、sakra（桜）、apra（油）

6.　音分割と音挿入

1 個のフォネームが前後に連続する 2 個のことなるフォネームに syntagmatic に分割される音韻変化を音分割という。北琉球方言にはいくつかの音分割の例がみられる。音分割の結果、語頭、語中、語末にあらたなフォネームが挿入される。

北琉球方言には、単語の語頭に別のフォネームが挿入される語頭音挿入 prothesis、単語内の連続する 2 個のフォネームの中間に別のフォネームが発生して挿入される語中音挿入 epenthesis、語末に別のフォネームが挿入される語末音挿入 epithesis がみられる。

6–1　語頭音挿入

今帰仁村西部地区方言では hat̪ʒike:（扱い[19]）、çik̪'usa:（戦）、ɸu̥ʃi:（牛）のように語頭の母音音節が ha、çi、ɸu であらわれ、語頭に h、ç、ɸ が挿入されたようにみえる。語頭の母音音節に無声摩擦音が音挿入されるには、語頭音節の無声音化があったであろうとかんがえる。

この語頭の音挿入は、第 2 音節めが無声子音ではじまる音節であるばあいにかぎられている。語頭の母音音節に無声子音がつづき、呼気流がよわまると、後続の無声子音の影響とあいまって語頭の母音音節が無声母音化して u̥ になったのではないかと考える。無声音化した母音は、その後、u̥ の無声性が子音 h になって u と分割し、語頭に h が挿入されたみることができる。

haʃi:（汗）、hat̪'a:（肩）、hak̪'a:（赤）、çit̪ʒa:（烏賊）、çit̪ʒi:（いつ）、çit̪'u:ma（暇）、ɸu̥k'i（桶）、ɸu̥t'a:（歌）、ɸu̥tʒi:（内）、ɸu̥p'uʔami（大雨）　　今帰仁村与那嶺

6–2　語中音挿入

大宜味村大宜味方言などにみられる /'iNsu/（味噌）を那覇市泉崎方言などの /'Nsu/ くらべると、語頭に i が挿入されているようにみえる。語頭の i はどのように挿入されたのか。

沖縄島北部諸方言の *miso の語頭音節の母音 i が弱化して消失すると、鼻音だけになるが、m は後続する s のために、s とおなじ口がまえで発する鼻音化した歯茎接近音 ɹ̃ になる。mi から変化した N/'N:su/ も 'ɹ̃:su とかんがえるが、語頭の持続部の立ち上がりで鼻音性がなくなって 'ɹ̃su となり、さらに 'iɹ̃su/'iNsu/ になったとかんがえる。語頭 'n: の持続部の立ち上がりで鼻音化した舌先母音 ɹ̃ の鼻音性が前後で分割されて、iɹ̃su になったものである。分割された結果、語頭に 'i が挿入されたとみれば、後述する語頭音挿入である。

*miso ＞ 'ɹ̃su ＞ 'ɹ̃:su ＞ 'ɹ̃su ＞ 'iɹ̃su

沖縄島北部の北山原方言にみられる *hune（船）＞ çiɲi/hini/ では、*hu ＞ hi という琉球語において例外的な音韻変化がおきているようにみえる。しかし、沖縄島西方の粟国島方言や渡名喜島方言にみられる n̥ni（船）を介すると、*hune（船）＞ hiɲi の変化過程がよく理解できる。語頭の無声摩擦音 h の影響で母音が無声音化 hul し、さらに後続の鼻音 n の逆行同化によって無声音化したまま鼻母音化 ũ̥ する一方で、さらに同化が進行して舌先での閉鎖がおきると、渡名喜島方言の n̥ni とおなじ形に変化する。後続の母音が i なので口蓋音化した鼻音 n̥ɲi である。無声音化した鼻音は呼気を浪費する不安定な発音であり、呼気の流出を制御するため、あるいは、呼気流のよわまりによって鼻腔へ呼気がながれなくなって、語末の母音 i の影響で i が語中に挿入（çɲi ＞ çiɲi）されて çiɲi の語形

になったとかんがえる。çɲi の ç の無声音性と口蓋性が分離したとみれば音分割であろう。

*pune（船）＞ ɸuɲi ＞ ɸu̥ɲi ＞ ɸn̥ɲi ＞ n̥ɲi ＞ çi̥ɲi ＞ çiɲi

6–3　語末音挿入

語末音挿入には、名護市幸喜方言の *tʃawan（茶碗）＞ tʃawanu:、sun（損）＞ sunu: にみられる語末の u の挿入、今帰仁村謝名方言に dʒini:（銭）などの i の挿入などがある。

*tʃawan（茶碗）＞ tʃawanu:、　　*son（損）＞ sun ＞ sunu:

7.　音融合と音分割と音挿入

沖永良部島の和泊町国頭方言の ɸju:（今日）、国頭以外の沖永良部島の集落の方言の çu:（今日）は、相互同化による音融合とその後の音分割によって生成された語形である[20)]。国頭方言 ɸju: の ɸj は両唇の摩擦音 ɸ が口蓋音化したもの、あるいは歯茎摩擦音 ç が唇音化したもので、唇音化と口蓋音化を同時に実現した摩擦音である。第二次基本母音 y の半母音化（接近音化）した ɥ が無声音化して摩擦音になったものであるが、これをあらわす音声記号がないので、仮に ɸj と表記する。

祖形を *kepu とみると、語中 p の摩擦音化 p ＞ ɸ、有声音化と唇音退化 ɸ ＞ w＝u、狭母音化 e ＞ i を経て発生した二重母音 iu の i の前舌狭母音性と u の奥舌円唇狭母音性が隣接相互部分同化によって融合して第二次基本母音の円唇前舌狭母音 y が生成されて *ɸy: ができたとかんがえる。その後、国頭方言では母音 y: の前舌狭母音の特徴がきえて奥舌円唇母音 u となり、口蓋音性は ɸj として子音にのこって分割された語形である。沖永良部島の他の集落の方言では ɸj の唇音退化した ç に変化している。

*kepu ＞ keɸu ＞ keu	異化・語中 p の摩擦音化、有声音化、w 音消失
*keu ＞ heu ＞ hiu	語頭 k の摩擦音化、e の狭母音化
*hiu ＞ *ɸy:	隣接相互部分同化による音融合
*ɸy: ＞ ɸju: ＞ çu:	口蓋音性と円唇奥舌母音の音分割、脱唇音化

8.　課題

北琉球方言の異化と同化の代表的な例を概観し、音挿入、音消失、音融合、音分割に異化と同化がかかわっていることをのべた。個々のフォネームが他のフォネームとの相互作用のなかで自らの韻質をどのように変化させたか、音節構造のなかで他のフォネームに対するふるまいをどう変えたかをみた。しかし、本稿の記述は、個別的、羅列的で

ある。個々の方言内での他の音韻変化との関連性や音韻体系のなかでの位置づけをおこなっていない。個々の音韻変化が北琉球方言の他の下位方言のそれとどう関連するか記述できていない。

国頭村宇嘉方言の破裂音 p、k、t は摩擦音 ɸ、h、s に変化しているが、それぞれの摩擦音化には共通点とちがいがある。それぞれの摩擦音化を比較しながらその要因を検討するとともに、宇嘉方言におきた破擦音 ts、dz の破裂音 t、d（r）への異化、唇軟口蓋接近音 w の唇軟口蓋破裂音 gw への異化との関連性の有無を検討する必要があるが、本稿ではそれを果たせていない。琉球方言におきた e ＞ i、o ＞ u、i ＞ ɪ などの狭母音化をひきこし、変化に方向性をあたえた発生拘束として呼気流のつよまりを想定できるのだが、宇嘉方言の摩擦音化や破裂音化にも発生拘束が存在するのか検討できていない[21)]。宇嘉方言を周辺方言と比較検討し、沖縄島北部諸方言内での位置づけも、とおくはなれた久高島方言で類似の異化がおきる理由の検討も[22)]、北琉球方言内での宇嘉方言の位置づけなどもおこなっていない。

本稿は、北琉球方言でおきた音韻変化の体系を記述し、音韻変化の詳細を明らかにするための準備的なものである。かりまた（2010）で南琉球方言についても記述したが、琉球方言全体の体系的な記述が必要であろう。

注

1） 琉球方言でおきた音韻変化の要因については、上村幸雄（1989）、かりまた（2009）、かりまた（2006）を参照。
2） 南琉球方言の同化と異化については、かりまた（2010）を参照。
3） 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著（1996）。
4） 同化を「条件変化 conditioned change」とよび、異化を「自生的変化 spontaneous change」あるいは「無条件変化 unconditioned change」とよぶこともできそうであるが、「異化」のなかには、語頭や語中にかぎっておこるものがあって、単語内での位置を音韻変化の条件とみることもできる。現段階では保留しておく。
5） addition of phonemes。添加ともいう。
6） lost of phonemes。音脱落、無音化、黙音化ともいう。
7） cleaving。本稿でいう音分割を日本語音聲學会編（1976）で「分裂 cleaving」とよんで解説している。亀井孝・河野六郎。千野栄一編著（1996）の「分裂 split」は、1 個の一部のアロフォンが音韻変化して、2 個のフォネームに paradigmatic に分裂することをあらわす。
8） contraction。縮約、凝縮、収約ともいう。
9） 狭母音化の要因について詳しくは上村幸雄（1989）、かりまた（2009）、かりまた（2006）を参照。
10） 詳しくは、名嘉順一・かりまたしげひさ（1989）、琉球方言研究クラブ（1990）、高橋ユキ（2008）を参照。
11） かりまた（2000）を参照。
12） 辺野喜方言については琉球方言研究クラブ（1991）を参照。
13） 久高島方言については、かりまた（1993）、琉球方言研究クラブ（1980）を参照。
14） 名護市史編さん委員会編（2006）pp. 318–319、358–359、生塩睦子（1999）を参照。
15） 語中の唇軟口蓋接近音 w は、唇音退化によって消失していた可能性がある。uwa の同化のばあい、w と先行の u は韻質が近似するので同化の結果をおおきくかえないとかんがえる。なお、

aと結合するばあいもふくめて語中のwは、消失しているが、先行母音がuのばあいはおそくまでのこっていた可能性もある。

16） 屋比久浩・かりまた（2006）は、沖縄島北部諸方言の「一つ」「二つ」のさまざまな語形やその変化過程について記述している。

17） acute accentについては上村幸雄（1992）を参照。

18） くわしくは、かりまた（1995）、かりまた（1996）を参照。

19） 喉頭音化した無声の破擦音をtz、tʒのように表記する。

20） 同じ相互同化が大神島方言、宮古島方言でもおきている。大神島方言のky:も宮古島平良下里方言のkju:（今日）も*keu > ky: > kju:のように隣接相互同化による音融合とその後の音分割によって生成された語形である。

21） 琉球方言における発生拘束については、かりまた（2009）でのべているが、さらに詳細な検討が必要だろう。

22） かりまた（2007）では、はなれた地点の類似する音韻変化を比較するとき、由来する形式と変化後の形式の韻質、変化の要因と過程、変化を条件づける音環境、音韻体系内での位置、他の音韻変化との整合性などを総合的に検討する必要があることについてのべた。

参考文献

上村幸雄（1992）「acute accentとgrave accent」『琉球列島における音声の収集と研究』、沖縄言語研究センター、pp. 44–48、沖縄。

上村幸雄（1990）『日本語の母音、子音、音節　調音運動の実験音声学的研究』国立国語研究所報告100、東京。

上村幸雄（1989）「音韻変化はどのようにしてひきおこされるか（2）――琉球列島諸方言のばあい――」『沖縄言語研究センター資料No. 79』、沖縄言語研究センター、pp. 1–16、沖縄。

上村幸雄（1978）『X線映画資料による母音の発音の研究、フォネーム研究序説』国立国語研究所報告60、東京。

生塩睦子（1999）『沖縄伊江島方言辞典』伊江村教育委員会、沖縄。

亀井孝・河野六郎・千野栄一編著（1996）『言語学大辞典（術語編）』三省堂、東京。

かりまたしげひさ（2010）「南琉球方言の同化と異化」『日本東洋文化論集』第16号、琉球大学法文学部紀要、pp. 159–196、沖縄。

かりまたしげひさ（2009）「琉球語音韻変化の研究」『ことばの科学12』、むぎ書房、pp. 276–354、東京。

かりまたしげひさ（2007）「琉球方言音韻研究の現況――音韻変化の体系の研究をめざして」『国文学解釈と鑑賞』第72巻7号、pp. 28–38、東京。

かりまたしげひさ（2006）「琉球語のせま母音化の要因をかんがえる――空気力学的な条件と筋弾性的な条件――」『沖縄文化』第40巻2号100号、pp. 234–253、沖縄。

かりまたしげひさ（2000）「北琉球方言における破裂音の摩擦音化」『音声研究』第4巻第1号、pp. 19–27、東京。

かりまたしげひさ（1999）「音声の面からみた琉球諸方言」『ことばの科学9』、むぎ書房、pp. 14–85、東京。

かりまたしげひさ（1996）「鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍方言のフォネーム（下）」『日本東洋文化論集』第2号、琉球大学法文学部紀要、pp. 1–57、沖縄。

かりまたしげひさ（1995）「鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍方言のフォネーム（上）」『日本東洋文化論集』創刊号、琉球大学法文学部紀要、pp. 1–23、沖縄。

かりまたしげひさ（1993）「久高島方言――その音声的な特徴からみた位置づけ――」『沖縄・久高島のイザイホー』、砂子屋書房、pp. 112–131、東京。

名嘉順一・かりまたしげひさ（1989）「第5章言語伝承第1節　言語」『座間味村史』、沖縄。

仲宗根政善（1983）『沖縄今帰仁方言辞典』角川書店、東京。
名護市史編さん委員会編（2006）『名護市史本編 10 言語――やんばるの方言』、沖縄。
高橋ユキ（2008）「阿嘉島方言の音韻」『琉球アジア社会文化研究』第 11 号、pp. 1–22、沖縄。
日本音聲學編（1976）『音聲學大辞典』三修社、東京。
服部四郎（1951）『音声学』岩波書店、東京。
屋比久浩・かりまたしげひさ（2006）「第 10 節数詞」『名護市史本編 10 言語――やんばるの方言』、pp. 524–543、沖縄。
琉球方言研究クラブ（1991）『琉大方言第 6 号――辺野喜方言の音韻体系』、沖縄。
琉球方言研究クラブ（1990）『琉大方言第 5 号――阿嘉方言の音韻体系』、沖縄。
琉球方言研究クラブ（1980）『琉球方言第 15 号――久高方言の音韻と語彙』、沖縄。